

Title	環境イメージの発達過程における役割行為の意義と効果に関する基礎的研究
Author(s)	近藤, 隆二郎
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.11501/3079345">https://doi.org/10.11501/3079345</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 【 3 】

氏 名	近 藤 隆 二 郎 （近藤 隆二 郎）
博士の専攻分野の名称	博 士 （ 工 学 ）
学 位 記 番 号	第 1 1 4 8 7 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 6 年 6 月 3 0 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科 環境工学専攻
学 位 論 文 名	環境イメージの発達過程における役割行為の意義と効果に関する 基礎的研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 盛 岡 通  教 授 東 孝 光 教 授 笹 田 剛 史 教 授 鳴 海 邦 碩

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、役割を介した主体の意味付けとその相互作用による環境イメージの発達過程を、①役割体験過程、②役割葛藤過程、③役割再構成過程に分け、事例分析を通して役割行為の意義と効果についてまとめたものであり、以下の8章より構成される。

第1章では、人間・環境システムの変容過程を、主体の意味づけとその相互作用として検討する意図を示し、論文の構成を述べた。

第2章では、人間・環境システムの変容過程を把握する枠組みとして、発達心理学における「移行」概念を用い、その過程を《転成過程》とした。環境イメージと結びついた役割概念（〈環境文脈的役割〉）を構築し、人間・環境システムが、①役割体験過程、②役割葛藤過程、③役割再構成過程の3段階を持つ《転成過程》を経て変容する様を分析対象とした。

第3章では、〈環境文脈的役割〉のデザイン過程を、コンセプトの純化と展開という2段階モデルで提示した。「まち巡りイベント」を取りあげ、①掘り起こし、②環境イメージの固定化、③役割の設定、④地域条件への埋め込み、⑤仕掛けの設定というデザインフローを持つ手法を提案し、具体例として大阪上町台地での実践例におけるデザインの実際を詳細に説明した。また、〈環境文脈的役割〉を付与した体験と環境イメージ形成との関連を比較実験により検証し、〈環境文脈的役割〉を体験することの有効性を体験直後において確認した。

第4章では、役割体験過程の分析対象として、大阪上町台地で4回実施した「まち巡りイベント」を取りあげた。アンケート調査を実施し、数量化Ⅲ類等を用いて参加者の意識を比較分析した。環境イメージは、場所の固有イメージと仕掛けられたイベントイメージとの相互作用の中で形成されると同時に、その後の時間経過とともに静的・抽象的に変容する傾向を持つことが確認された。また、複数の役割を演じること（多演性）が総合的な意識形成には効果的であった。役割を仕掛ける場合には、対象とする環境（場所性、固有イメージなど）とコンセプト（役割、テーマなど）との組み合わせに配慮することの必要性を指摘した。

第5章では、役割葛藤過程の分析対象として、墨田区と伊勢市の「ミニ博物館事業」を取りあげた。付与された館長

の役割と過去の自らの意識との葛藤過程について、現地調査と過去の資料における各コメントを収集し、カテゴリー化して分析した。数量化Ⅲ類を用いて回答パターンの時間的変化を分析した結果、開館初期の躍動的で外面的な意識が数年を経ると沈静化し、評価・希望といった自立的な意識に変化することを確認した。また、各博物館を機能別に6つのタイプにクラスター化した上で意識変化を考察した結果、機能別タイプごとに館長の役割に対する姿勢が異なることを示した。館長の役割が個人の履歴、技、嗜好といったライフスタイルに結び付けられる場合に、積極的にその役割を演じようとする主体意識形成の促進とそれを受容する柔軟性が役割付与側の姿勢には求められることを明らかにした。

第6章は、役割再構成過程の分析対象として、北播磨地域の8つのミニチュア巡礼地を取りあげた。設立意図にみる初期の環境イメージが変容してきた過程を現地調査と文献調査で分析した。ミニチュア巡礼地が「四国八十八ヶ所」という環境イメージを身体行為で連想する空間であったことを明らかにした。現在でも多数の巡拝者が集まるミニチュア巡礼地では、「共演」という役割間の相互作用を通してその環境イメージを柔軟に変容し、時代に合わせた価値を付加創造していたことを確認した。また、その「共演」が①シンプルな役割の組み合わせによる硬化性の忌避、②シナリオの共有度の高さ、③移した空間である柔軟性によって自由度を保証されていたことを評価した。

第7章では、各分析事例の人間・環境システムにおける「転成過程」の3段階を再提示するとともに、関連する多主体の中で位置づけ、各段階が相互に重複しながらシステムを成立させていることを示した。すなわち、人間・環境システムの変容過程は、多主体の変容過程が各段階で相互に関連し合いながら進む多層的な構造になっているとした。この多層的な構造を前提とした意味的市民参加システムを構想し、その留意点についてまとめた。

第8章では、各章についてまとめ、本論文で得られた成果の総括と展望について述べた。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、環境計画における市民参画手法の基礎として、環境イメージの形成過程を取りあげた研究である。すなわち、〈環境文脈的役割〉という役割概念を用いて、その形成過程を事例分析を通してまとめたものである。得られた結果を要約すると以下の通りである。

- (1) 環境イメージと結びついた〈環境文脈的役割〉概念を構築し、〈環境文脈的役割〉を介した主体の意味付けとその相互作用による環境イメージの発達過程を、①役割体験過程、②役割葛藤過程、③役割再構成過程の3段階を持つ発達過程として提案し、〈環境文脈的役割〉のデザインフローを純化し、展開するという2段階で示している。
- (2) 役割体験過程において、環境イメージが場所の固有イメージと〈環境文脈的役割〉体験の相互作用で形成されること、および主体形成において複数回体験が有効であることを、上町台地でのまちを巡るイベントに参加した人びとの意識を多変量解析を用いて分析した結果から明示している。
- (3) 役割葛藤過程においては、積極的に役割を修正してゆく主体の促進、および役割付与側がそれを受け入れる柔軟性が必要であることを、墨田と伊勢のまちかどに小博物館を設置する事業において、館長を演じる意識を多変量解析を用いて分析した結果を用いて提言している。
- (4) 役割再構成過程においては、共に演じるという複数の〈環境文脈的役割〉間の相互作用の存在が環境イメージを柔軟に変容し、時代に合った新しい価値を付加創造することを、北播磨の四国八十八ヶ所を模倣してつくられた小巡礼地の環境イメージの変容過程を現地調査と文献調査によって分析することを通して確認している。
- (5) 各段階として取り上げた分析事例について比較考察することで、各分析事例中に発達過程の3段階が存在することを明示し、提案した発達過程の有効性を確認している。

以上のように、本論文は、環境計画において、環境に対する主体の意味付けを〈環境文脈的役割〉という役割概念を用いて定式化し、その意味付けの発達過程を3段階モデルとして提案し、各段階ごとの詳細な事例分析を通して〈環境文脈的役割〉を市民参画手法として用いる際の基礎的枠組みを提示しており、環境工学の発展に寄与する所大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。